

秋・病床の思出：歌

著者	北古賀，保定
雑誌名	龍南
巻	2 1 1
ページ	2 8 - 2 8
発行年	1929-12-10
URL	http://hdl.handle.net/2298/6900

秋・病床の思出

北 古 賀 保 定

沖邊行く汽船の煙蹄きをり新銀村の晝の静けさ

唐黍の枯葉のさやぎさやくと秋の日白く野路に耀ふ

秋雨に書静かなるさ庭べにひた紅の檀特の花

蛇の主住むてふ小沼の静かさや雲影一つ動かざりけり

朝風に背冷やくとし床の上に座り直りて粥喰す吾は

老いし母思へばいと悲しかり野風呂の煙白々と見ゆ

をち山の高嶺に朝日射す見えて退院近く今日も晴れたり

朝さらす日光さし来る窓先に蒼空見えて秋づきにけり

この朝け秋の山里しぬびつゝ幼心地に吾がなりにけり

硝子戸の外面の風はぬるむらし秋の日射しに女郎花揺る